

舞台評

日本語を語り、歌うことは私たちにとつて身近なことである。しかし、生で直接声を伝えるには、理想的な発声といわれるベルカント唱法と、もともと狭い空間で話すことが多かった日本語からの発声方法は、融合することが難しい関係であった。これをどのように両立・分立させるかということが、日本語で歌曲やオペラに携わる人たちの課題であった。

山形オペラ協会「詠唱風土記」



「泣いた赤鬼」を取り上げた山形オペラ協会の公演
山形市中央公民館

歌でしか伝えられない表現力

さる9月24日、「詠唱風土記」と称された山形オペラ協会（会長・藤野祐一山形大教授）による公演は、この問いかげの一つの応えとなつて響いた。前後2部で構成され、前半は14の日本歌曲、後半は山形ゆかりの童話作家浜田広介原作によるオペラ「泣いた赤鬼」（松井和彦作曲）が上演された。

オペラは4人の村人でお話。物語はナレータにより、わかりやすく導かれる。人間と仲良くしたい赤鬼が心情を歌うアリア、それを助けために悪役を買って出る青鬼のアリアが、明瞭な言葉で歌われた。赤鬼が青鬼のおかげで村人と仲良くなり、へしりとり遊びを通して描かれる交流場

面は聴きどころ。聴衆はへしりとの答えを一緒に考えながら聴くことになる。百姓の女房が歌う、歌詞のない装飾的なメロディー、百姓、きこりのコミカルなやり取り、ドジョウすくい、振り付けなど、笑いをさそい、子供も大人も楽しめる場面となっている。最後は、赤鬼が手紙をのこして村を去った青鬼を悲しみ嘆

き、途中からは青鬼も加わり、メッセージを歌う。「青鬼くんー青鬼くんー」と切々と歌われるフレーズは、歌でしか伝えられない表現力があつた。

希望を述べれば、オペラのアリアはアンサンブルや合唱の役割とは異なり、言葉とはまた別に、声そのもので心情を表現する力も要求される。より高みを目指して声を研いでいかれることを期待したい。原作は、オペラのための台本として換骨奪胎されている。それならば、青鬼の自己犠牲の上に立つ終わり方ではなく、この先、青鬼も戻つて仲良く暮らす大団円があつてもよいのではと感した。

今回の舞台は、演出、装置、衣装、照明、楽器奏者、指揮者により、歌い手たちはしつかり支えられていた。山形オペラ協会の熱意の結晶に拍手を送りたい。

（長谷川勉・作曲家、山形市

市）
9月24日、山形市中央公民館